

龍吟じ虎嘯く

身近に見る幽石翁の俳句

河本 祖舟

耕雲庵老師には、『句津籠』正、続、続々三冊の句集がある。その中の続『句津籠』の辞に「傘寿を期に、家醜『句津籠』の続編を出すことになった。例によって日記代わりに詠み棄てた句に過ぎないが、愚老の平常に関心を持たるる仁のご披見を待つ」(昭和四十七年五月五日 耕雲庵にて 立田幽石)とある。愚生もその句縁につながる者の一人として、種々ご教示を頂いたことから、身近に見る「玉什五顆」に私なりに触れさせていただくことにする。

その(一) < 林泉の落葉音聞くことひとり >

この句の出所である「林泉」は、国富山少林寺にある遠州流の庭園のことである。寺は岡山駅から市電東山線に乗り、その終点から山裾を北へ約1キロ足らず行った山の麓に在る。

寺の本堂の東から北へ三間続きの書院があつて、その長い廊下に沿う山裾一帯が庭で、中には大きな池がある。廊下の南の端は厠で、外の木戸との間に百年を越す曙椿があり、天然記念物に指定されていて、庭全体に睨みを利かせているように見える。

摂心会になると、庫裡に近い書院のひと間が老師の居間になる。戦後間のない頃とて参加者は少なかった。「PRの時代だ。少しはPRしているのか。電車の中に看板は出せんのか。今の今だって生きるか死ぬるかに悩んでいる人もいる筈だ」と嘆かれるものの、在家の職業

人の集まりであるから昼間は出払っていて、広い伽藍は閑散としている。泉水では鯉が時折大きな音を立てて跳ねる。楓や櫟の葉が風がないのに何処からともなく舞い降りる。撰心会が了り、懇親会の終わるころ、「たまには趣向を変えて、句会があってもよからう」と予め連絡があったようで、俳句の先生を囲んでの句会となった。参加者は少なかった。俳句を始めたばかりの私は出句なしの参加であったが、五句選の中の三句までも老師の句であって、その中の一句が表出の句なのである。六十年も前のことなのに今も忘れずにいるのが、我ながら不思議でならない。『句津籠』昭和二十八年熊本の泰勝寺での句に

< 閑庭や花散る音のまぎれなき >

がある。春と秋の違いはあるものの、同じころの句ではなかったか。

この句会での先生のお顔も名前も知らずにいたが、あとで、『曲水』の渡辺水巴先生最後の愛弟子と言われた大野梢子さんであることを知った。梢子さんはとても静かで控えめな方なのである。何かの時、市内広瀬町のお宅を訪ねたときである。玄関に入った直ぐのところに梢子さん宛の水巴先生からの長い手紙が額装されて懸っていて目を見張った。流麗な筆致のなかに溢れんばかりの慈愛と梢子さんに対する期待が見て取れるのであった。

またの時である。梢子さん秘蔵の水巴先生の父君、省亭画伯の描く「滝」の軸を見せて貰った。清澄な滝のもたらす靈氣に息を呑んだが、水巴先生の感性というか靈性というか、父子相伝ともいえるものを見たのであった。

梢子さんが身罷られ、葬後の弔問の返しに頂いた袱紗に、本人自筆で紫地に次の句が染め残されてあった。

< 風化仏天を花野として眠る >

その(二) < 娘が母になりし報せや笹鳴きす >

平成五年五月、半年ぶりに本部道場の山門をくぐった。滴るばかり

の青葉、若葉を縫うようにして入った玄關の出頭簿のある机の前の壁面に、画賛入りの色紙が掛かっていた。落款からして幽石翁のものされたものとわかりながら、直ぐには読み取れなかった。晩年の放胆自在さはここには無く変体仮名まじりのたおやかな筆致で、手習いのお手本になりそうだった。下絵の松の花も一筆ごとに丹念な筆使いである。このように拝見していると書にしても絵にしても我流ではなく、本格に習っておられることがわかる。ふと親交深かった碧雲居先生のことか思い浮かんだ。

『句津籠』昭和三十二年二月に「次女に男児生まる」として

< 白玉椿やほのぼの点ちしけさのお茶 >

とあるから、同じ時季のお作であることがわかる。因みに笹鳴とは、夏繁殖した鶯が冬になって里近くに姿を現し、木々を飛び移りチャツ、チャツと舌打ちするように地鳴きをすることをいう。

その(三) < 元日や水漬たれて大愚たり >

あまりにも老々大々としていて、老師還暦の句とは思えない。まるで傘寿をも越えられた頃の句かと思え、近寄りがたい面持なのである。

「唐墨を如々庵から貰ったので、書いてみたい」とおっしゃっていたが、半折の画仙紙を三つ切にした大きさに、鬼灯が三個、皮のままを両脇に、中の一つは皮を着けたまま裸になっている。その上に横書き三行にとつとつとした筆致でしたためられている。中国支部へ贈られて来た中の一つである。写真集にも載せられている。茶掛けにしたこの軸を前に家人を喚んで茶を点てるのだが、反響は意外と少ない。そこで愚生なりに一句を案じて『曲水』の小川原先生の添削を受けたところ、「説明。作者は自らを大愚と断定し、水漬を澄ましている」と朱書きされて返ってきた。

老師はこのころ既に『曲水』誌上では主宰選の曲水句帖(七句出句中四句が最高)の四句の常連で、その上位を占めておられたし、その

他白日集、流觴（さかずき流し）雑詠の三か所の欄にも欠かさず出句しておられた。

その(四) <風呂場まで五十七歩や春の雨>

「道場を建てよ。道場さえあれば道場を抛り所に法は続く」とおっしゃるのであった。

その道場が曲りなりにも出来た。摂心会も了り落慶式を明日に控えた前夜祭の前のひと時、なだらかな坂径を傘を手に風呂場へ下りて行かれる無碍自在な老師のお姿であった。

老師が帰寂されて何年か経った頃、風呂場に近い山裾にあった石が、降り続く雨でずり落ちて径をふさいだ。重さは一トンを下るまい。六面ある中の一面は座布団大で平らである。ここに刻んだのが落慶時に詠まれた十句の中のこの一句なのである。五十七歩とあるが、余人の足ではゆうに七十五歩はあるうか。なにせ三十五年間千里来住、上求下化の足跡が句碑になってここに在ると思えば、夢のようで偶然とは思えないのである。

その(五) <我ここに今もかく在り日向ぼこ>

人間禅五十五周年記念式の出し物である模擬店の準備を終わった頃、千駄庵老師のお声掛かりで、中国分のご自宅へ三支部12名揃って上がらせて頂いた。ご家族皆様の心遣いで気ままに、自由にくつろがせて頂いた上に、何日も口にしなかったビールをおいしく頂いた。

ふと部屋の片隅にある手文庫の上に立てかけてある素焼きの皿を目にした私は、無遠慮に手に取って眺めていて、上記の句であることがわかった。『句津籠』の扉にある老師自画賛の句の原句ではなからうか。

原句の中七の「も」を取り、「在り」の後に「ぬ」を置くと<我ここに今かく在りぬ日向ぼこ>となる。たった一音の据わる位置を変え

ただで、句のもたらす意味・内容が変わってくるから恐ろしい。とは言うものの、愚生にはもとの中七<今もかく在り>に愛着がある。素凡夫の故であろうか。

以上五句ながら、幽石翁の平常に関心を寄せる一人として、不敏を顧みず、稿を求められるまま、拙文を弄した次第である。

著者プロフィール



河本祖舟（本名／雄策）

大正11年、岡山県生まれ。昭和16年、両忘禅協会立田英山居士に入門。昭和25年、人間禅立田英山老師に再入門。現在、人間禅布教師。軒号／碧水軒。俳号／遊子。

